

「夢應の鯉魚」

李 仁 嬋

〈目 次〉

I 序 論	3. 佛教の戒律
II 本 論	4. 欲望と自制
1. 作品の意圖	5. 典據と獨自性
2. 怪異とリアル	III 結 論

I 序 論

江戸時代の上田秋成¹⁾(一七三四—一八〇九)は、小説の作者として、日本文學史上に名を残した人であり、その小説作品の中でも特に「雨月物語」²⁾と「春雨物語」³⁾とによって後世の高い評価を受けている。この二作は、上田秋成の小説作品の中では群を抜いた出来ばえであって、文學に對する上田秋成の理想がすべて籠められていると言ってさしつかえない。

「雨月物語」は、怪異を扱った小説集であるので、全編に超現實的なものが登場する。即ち、魔王とか、幽霊とか、邪神とかである。こうした超現實的存在は種類が雑多である。人間の世界と超現實世界との間に、倫理のみならず情愛その他の面においても、差を認めないところから生ずるのである。

「雨月物語」における超現實の世界というものは、人間の世界と隔絶している世界ではない。人間の論理が——倫理も情愛も、またその他の事柄も——そのまま持ち越されている世界なのである。言い換えれば、それは人間世界の延長である。だから、超現實世界の往來も——誰でも行き來ができるというほど簡単なものではないにしても——ちょっとしたきっかけさえあれば比較的容易に實現し得るのである。唯一の違う点は、超現實の世界では、人間を超えた能力を持ち得るところだけである。

1) 上田秋成(1734—1809)、江戸中期の浮世草子、讀本作者、國學者。

2) 「雨月物語」、江戸時代讀本、前枝崎人(上田秋成)、近古奇談雨月物語、1776年、安永五年版の半紙本五册、五卷九話。

3) 「春雨物語」讀本、上田秋成、二卷十章、文化五年春三月。

採録や翻案や考證からの怪異譚は数多い。又近世を通じてどの國にも怪異幻想が民間に深く信じられていたことは言うまでもない。

夢は實に古代から中世にかけて、靈夢となって現れたり、應夢で現れたりした。この怪異と夢とを織りまぜて作られた物語が「夢應の鯉魚」の蘇生譚である。「夢應の鯉魚」とは、夢の中で見たものを覺めたのちに想起して畫いた鯉のことで、この作品の題目の出所である。

「雨月物語」の第四話「夢應の鯉魚」で主人公興義^りはひとかたならず魚を愛した人間であるが、人間として魚を愛するにとどまらず自ら魚となって琵琶湖を好きなように泳ぎ廻ることができるようになり、魚となったあとも興義は人間の心を失わず、飢えてきても「我は佛の御弟子なり、しばし食を求め得ずとも、なぞもあさましく魚の餌を飲むべき」などと考えたりしていた。

それは延長(九二三一—九三一)の頃のこと、三井寺の興義という僧が、漁夫から鯉を買っては、それを琵琶湖に放し、その様子を繪に描き、その繪は名畫とほめたたえられていた。ある時、興義は病氣にかかって亡くなってしまった。しかし、胸のあたりが少しあたたかいので、葬らずにいると、三日目に目を開き、起きあがる。話によると「苦しさのあまりの熱をさまそうと、湖で泳いでいるうちに、放生の功德と言われて、金色の鯉にされ自由自在に泳ぎ回っている時に、空腹に耐えかねて、餌に喰いつき、つり上げられ、料理されて初めて気がついた」とのことだった。ということで、その中心は、鯉魚に化した僧が湖中を泳ぎ回っているところにあり、魚になった人間を巧みに描いているところが、この一篇の中心となっている。

つまり常に魚を愛した興義が魚に化するという体験を経て、湖水を思うままに泳ぎ遊ぶ自由な魚の境涯にあこがれていたのが、自ら魚に化してみると、魚のもつ自由性は釣の餌という誘惑に對して、食慾という本能を自制するときにはじめて保たれるものであり、常に身を危険から守るために本能との戦いをくり返しているものであることを悟る、ここにはじめて興義は魚の自由性の意味と限界を知る。

この一篇は怪異描寫とはいいいながら、明るい描寫で、讀者を楽しませるものになっている。そして怪異をとおして、秋成は一藝に徹した人間の美しさを描いている。

この作品で「藝術三昧境」に遊ぶ興義と、「餓えて食を求めんとすれば、人の好餌にかかって現實の手ひどい目に逢う」興義との姿の両面を見ることが出来る。

さて、次に本論に入ることにするが、ここでは「夢應の鯉魚」が、「雨月物語」の他の諸篇と同じく、多くの典據を指摘することができるので、それらの典據についての諸家の指摘研究のあとをさぐってみると共に、その創作意圖や、更には主人公たる興義の人物像を解明すると共に作者秋成が本篇で表現しようとしたものが何であったか——こうした事を追求しようとするのが、本論文の主たる

4) 興義 古今著聞集十一にその名が見える、「成光、閑院の障子に鶴を書きたりけるを、實の鶴見て蹴けるとなん。この成光は、三井寺の僧興義が弟子になん侍りける」。この作品の主人公。

ねらいである。

ちなみに、諸家の「夢應の鯉魚」への評価であるが、圓地文子氏のように本篇を殆ど無視とまでは言わないが、殆んど否定的な論法で同じ「雨月物語」中の「貧福論」の一篇と共に軽く扱う立場もあり①、更には、野田壽雄氏のように一体何を目的にして書いたのか、ちょっと得体の知れない一篇である②、とする評者もあるようだが、筆者は矢張り秋成の作品としての異色ある好短篇として、十分に論究されるべきものとして、以下取り上げた次第である。

① 圓地文子「江戸文學問わず語り」の中上田秋成の項

② 野田壽雄「評註雨月物語全釋」

Ⅱ 本 論

1. 作品の意圖

何らかの意味において争うべき相手があり、その相手と争い続けなければならないというのは、人間を捉えている一つの宿命である。復讐に執念を燃やすという業に囚われなければ、永劫の戦いという別の業に囚われるのが人間の一面である。「雨月物語」の人間達は、常に何かに囚われている。復讐をするということに、約束を守るということに、夫を待つということに、愛するということに……。このように人間に取りついている業というものを解き放って、我々人間はもっと自由の境地に遊ぶことは出来ないものだろうか。

この自由の境地でしばらくとも興義を通して遊ぶことが出来るように秋成はこの「夢應の鯉魚」を書いたともひ言えよう。

この主人公興義は、現實世界を離れて自由の身の魚となり、「尾を振鱗を動かして心のままに逍遙」した人物である。もともと魚を愛し、夢のうちに魚と遊ぶ人であるから、自身魚となって琵琶湖を巡り泳ぐのは、これ以上のものは望めない絶対境であったろう。興義は「日あたたかなれば浮び、風あらきときは千尋の底に遊ぶ」という悠々たる境地に遊んだのであったが、「急にも飢て食ほしげなる」状態となり、漁夫のたれる釣糸の餌を呑み込んで引き上げられた。そして、切られるとおぼえて夢醒めるのである。

「人間が、生きていく以上は、自由の境地に遊ぶなどということは、きわめて難しいことのようにだ。我々は、常に絶対境を望みながら——そして一時的には絶対境に遊ぶことに成功しながら——必ず、食うために現實に引き戻されるのである。」③とする結論を大輪靖宏氏は出した。

「夢應の鯉魚」において、不思議の秘密は、興義が夢の中で琵琶湖に出て、水泳ぎをしているうちに、魚になりたいと思う。その時水神があらわれ、その願いを入れ、興義を大きな鯉にしてしまうことに起る。水神が彼の願いを聞き入れたのは、彼が平生魚に對して放生の功德をほどこしていたからである。ただこの時、水神は餌にくらまされて釣糸にかからぬように警告する。しかし、この警告を彼は破ることによって自由は終りになる。

「雨月物語」の第四話「夢應の鯉魚」という物語で上田秋成は、何を描くことを目的としていたのだろうか。この物語は繪の巧みな僧侶の話で、彼は放生の功德即ち佛教で説く善行の一つで、捕えられた生き物を生きたままの状態に自然に歸してやる行爲によって、魚の世界に遊ぶことができた、というものである。この三井寺の興義という繪の上手な僧が漁師の獲った魚をもとの水にもどしては、そのあそぶさまを繪に畫いた。ある時病にかかったが、そのまま息が絶えた。しかし彼は夢を見ていた。自分が金色の鯉になり、琵琶湖を泳いでいるうちに、漁師に釣り上げられ、平の助の館で料理されようとする夢である。驚いて聲をあげたときに、息を吹きかえした。けれども、夢はかならずしも單なる夢ではなかった。彼か息を吹きかえした時に、館で鯉が料理されようとしていたことも事實であったし、三日間、彼が死んでいたことも事實であった。夢からさめた興義が、夢の中での魚となった体験を人々に語ると、その鱈(刺身)を食べていた者たちも急いでそれを湖に捨ててしまった。その後、興義の鯉の繪はますます迫力のあるすばらしい境地に至ったという。この作品の主題について、中村幸彦氏は、「藝術三昧境」④に遊ぶ興義と、「餓えて食を求めんとすれば、人の好餌にかかって現實の手ひどい目に逢う」⑤興義との姿をとおして、秋成自身の藝術生活と現實世界との矛盾を描こうとしていると解された。この「夢應の鯉魚」は、殺生を禁じた佛教の戒しめにもなると解せられてよいだろう。

こうした佛教の戒律の一つをテーマとしながらも、この作品全体の雰囲気極めて明るく護教的臭氣が感じられない。そして又、ここには人間の深刻な苦惱や、人間關係の緊迫感がない。むしろ、興義と鯉の世界との交感によって、人間のやさしさ、暖かさを感じさせるであろう。このようなやさしく、明るい世界こそ、この「夢應の鯉魚」に秋成が意圖したものではなかっただろうか。つまり秋成は「白峯」から「淺茅が宿」まで連続してきた緊張をときほぐし、讀者の心を和ませる役割がこの「夢應の鯉魚」にあったのである。ここで一と息入れて、前に上げた緊張した作品へと読み進んでいくことになる。かくのごとく「夢應の鯉魚」は前半をその明るい色彩で休止させる位置を占める作品だとも言い得るのである。

③ 「上田秋成文學研究」二〇二頁

④ 日本古典文學大系上田秋成集(岩波書店の解説)

⑤ " " "

2. 怪異とリアル

秋成の小説は常にその表裏において力強い感覚を受ける。それは秋成の内面における精神活動が雄渾である證であるが、また一方、その描寫は幻想的で迫真力にとんでいる。ここにおのずと、怪異美が醸され、神韻縹渺たる美的感覺にとらえられる。しかし怪異譚は單に怪異譚に終るのではない。秋成の作品「雨月物語」のどの一編をとってみても、現實の抑壓に耐え得られず、その苦惱を超現實の世界で解放し、あるいは、その願望を幽冥界でかなえるという人間本來の純粹性をとりもどした人間性の絶唱である。「菊花の約」「淺茅が宿」は封建的現實から解かれた幽魂が人間の眞實を適える。「夢應の鯉魚」は遊戯三昧に浸ることによって自由を獲得した。これらはすべて宗教佛教で固められた封建的な一切を批判したものとも見ることが出來、登場者を幽魂にとり、時代を過去にとつて、人間の本質を主張したものといえるだろう。

秋成の生きたときは近世封建の解体期であり、日本國學の誕生、異國文化の渡來があつて、この封建的危機意識を怪異美によりながら、これを克服せんとする文學であると見ることができ、怪異美的危機感覺の文學といえるだろう。

秋成は世間一般に行われている考え方に不合理なものを見だし、怒りをぶつけていたのであつた。その學問のあり方、佛教の因果應報説や歌學について、秋成の日常鬱積している不満や不信が作品となっているのである。

登場人物たちはそれぞれ、作者の感動をうけて、怒りや悲しみやその他さまざまの感情を表わし、混沌とした感情の息づかいを躍動させている。秋成の文學は決して整合的な、緻密な計算の上になりたつた世界ではない。強い倫理性をもつた主題を追求しながらも、そこには衝動的な感情が息づいているのである。そこに秋成文學の魅力があるのである。たとえば「夢應の鯉魚」は何の激しさも感ぜられない穏やかな世界が描かれていた。だが、この作品にしても秋成は興義という俗の感情の動きに焦点をあわせて表現している。魚と化した興義が、湖水で泳ぐさまを描くのだが、まわりの景色を道行ぶりの筆づかいで美しく描寫している。だが筆者は魚となった興義の感情をとおして景色を描寫している秋成の態度に注目しなければならない。あるいは漁夫文四にとらえられた魚の興義の、料理されんとして苦しみがくさまが描かれる。秋成は、登場人物の外面の描寫よりも、こうした感情の動きに焦点をあわせるのである。同様に、亡霊や怪異が描かれるときも、そのさまの外的なおそろしさや凄じさを描寫するよりも、その怨念や憤怒あるいは悲哀の情などに激しく感情を高ぶせたさまを描くのである。それによって、リアルな力をもって恐ろしさが讀者に迫ってくる。このように秋成の作品には感情の躍動が特徴的に見られる。それは彼の疎離者としての特有の感情の激しさから出たものかも知れない。この「もえる感情」が美として結晶され

な極地が悲劇美を追求した世界であった。秋成の作品には、その主題に対する彼の強い感情が見られるのである。それは憤りであり、悲しみであり、喜びであり、内からつき動かされるカオス的な衝動であった。とくに、倫理的な高さを維持しようという精神に出會ったとき、彼の心は燃えるような感動にうち震えるのである。

3. 佛教の戒律

「夢應の鯉魚」の主人公興義は殺生を忌むところの僧侶であり、かつ、魚に愛着を示す畜人として設定されていたことだが、「放生の功德」をもって魚になる自由を得るという筋の展開を緊密にしており、俗世間的な欲望を去ったはずの僧興義に對してなされるところの「只餌の香ばしきに味まされて、釣の糸にかかり身を亡ふ事なかれ」という海神の戒めは、鯉魚に化した興義の行動と深い関わりを持つことになるのである。

この戒めは、佛弟子たる興義の以後の行爲を規定する力を持つ。興義が戒めを破ることは、僧侶としての全人格を否定されることを意味するのである。

興義は香しい餌にひかれる心を、「我は佛の御弟子なり。しばし食を求め得ずとも、なぞもあきましく魚の餌を飲むべき」と一度は強く自省する。「なぞもあきましく魚の餌を飲むべき」というのは魚に化した興義が人間としての自省心をもっていることを示すとともに、「佛の御弟子」とし煩惱のおこることを自戒する心が強くはたらいっている。しかし、飢えがますます甚だしくなるとついに堪えがなくなると、「たとへ此餌を飲とも嗚呼に捕れんやは」と魚の身の欲望が自制心を制してしまふ。人間界においては全ての煩惱を超越したはずの身が、堪えがたい飢えに迫られては魚としての欲望に負けてしまうのである。また、その欲望を肯定するために、魚に化した身を忘れて、「もとより他は相識ものなれば、何のはばかりかあらん」と、人間としての仲間意識を示している。

中村博保氏は、この部分を「魚の身になった興義の心を述べながら、魚と人間の心の交錯と矛盾、その心理的な推移を、簡潔的確にまとめて」いるとして、「この作品では、主人公が魚に化しながら、なお人間の浅智恵を捨て切らぬために、自ら好餌にかかるという人間性の矛盾とその批評に焦点が置かれている」と述べられる。「夢應の鯉魚」においては、人間界において全ての煩惱を超越したはずの興義が、飢えの煩悩においては佛弟子としての戒めを破って、あきましく魚としての欲望に負けてしまう心理の變化に焦点があてられているのであり、海神の戒めにもかかわらず、佛弟子の身を忘れて魚の心になりきってしまったことが、自ら死の淵へ追い込む原因となるのである。

興義は餌を呑んで漁夫に捕えられ鱸にされようとする。興義は魚の心になって欲望に負け、佛弟子としての戒めを忘れたことを「悔しつづ、絶望的な叫びを發している。しかしその叫びは漁夫には通じない。興義の「佛弟子を害する例やある。我を助けよ助けよ」という絶叫には、煩惱に惑わ

こうした最も遠い取り合せを持って來ることによって、我々一般もまた、どのようなものに俗世を忘れる絶對境を見出そうと思議はなくなるのである。つまり、僧と魚という取り合せをすることによって、この「夢應の鯉魚」という短篇は、人間全体の上について共通して言い得る一つの問題を扱ったことになってくるのである。

興義は僧侶である。それも天台宗寺門派總本山の三井寺(園城寺)の僧である。讀者は、冒頭の紹介の一文から高德の僧を想像するであろう。その僧が鯉魚を愛で、その繪を好むのも、繪に心を凝らして夢中に遊泳するというのも、安心立命の境地に達したものの雅懐と瀟灑な心の表われであると言える。放生の功德を積むのも、諸講の中で殺生をする衆生を戒めようとするのも、衆生濟度の心のおのずからの表われであったと言ってよい。

しかし現世の營みから超然としているかに見える藝術三昧境には、誰も氣付かぬ大きな陥穽があった。繪に心を凝らす心は、すでに一つの執着心として「魚の遊びをうらやむ」欲望に轉化する。安心立命境の雅懐が、いつか最も忌むべき執着の權化に轉落するのである。鯉魚に化しての水中逍遙は、自由の絶對境などではない。自ら悟らずして執着と欲望の修羅に墮ちていく人間の心の弱さ、愚かさの表われである。水中遊泳を願ったのは、「愚なる夢ごころ」であった。

秋成は、すでに執着・欲望のとりことなつた興義の心の微妙な變化を記した。

その後の物語の展開は、そのまま執着心・欲望と自制心との戦いであったと言える。自制心を貫き通すことは獄死を意味する。しかし、欲望・執着心を受け入れるならば、その瞬間に佛の使徒たる心かもっとも忌むべき妄執のとりこに轉落する。釣の餌という忌むべきしかしこの上なく魅惑的な存在が、彼の生の有り方を問い求めることになる。それは佛者興義にとって信念に従つた死か、破戒無愆の汚名を着た生かの選擇であった。その意味から言えば釣り上げられていかなる哀願も受けられずに鱸にされようとする間の地獄の苦しみは、佛の道に外れたものを受くべき佛罰であると言うことになる。

琵琶湖逍遙の部分は、秋成が興義に記した自由への願望の表われなどではない。歌枕を巡り、風流な遊びに耽溺している間にも忍び寄る執着心の存在を描こうとしたのに外ならない。

興義の弟子成光の逸話は、死の淵をさまようという奇異な体験を経て神妙の域に達した、興義の畫境を傍證するものとして語られている。この逸話はそれ自体完結した名人説話であるが、その神妙境に至る過程に、秋成は我執を超越せんとする人間の修羅の闘いを見たのであろう。畫に生命を吹き込むという神技の境地は、すべての執着を絶ち切つた人間のはじめて到達し得る世界である。天壽を全うし、「其終焉に臨みて畫く所の鯉魚數枚をとりて湖に散せば、畫ける魚紙繭をはなれて水に遊戯した」という名人藝を記す後日談は、眞の藝術三昧境に達した興義の超俗的な姿を髣髴させる。

確かに「夢應の鯉魚」は明るくユーモラスな筆致で描かれており、そこに軽い遊びの氣分が看取されることは認められる。しかし、その奥に込められた我執離脱の苦しみは、執心のために修羅を

さまよう他篇の主人公たちのそれと決して異質のものではない。主人公を僧侶に、畫人に設定して、原話の奇談的説話の域を越えた欲望と自省心との苛烈な戦いを構想したとき、「夢應の鯉魚」は『雨月物語』の一篇として明確に位置付けられていたのである。

5. 典據と獨自性

「夢應の鯉魚」は中國説話の奇談的なプロットをそのまま取り入れて構成された典型的な翻案小説である。主な典據は(一)『醒世恒言⁵⁾』(『薛録事魚服証仙⁶⁾』)であり、ほかに(二)『古今説海⁷⁾』(『魚服記⁸⁾』)。(三)『古今著聞集⁹⁾』などの典據を持っている

「夢應の鯉魚」は、話の大筋を得た典據「魚服記」が、青城縣の主簿である薛偉という一地方役人の奇異な体験を描いているのに對し、主人公を三井寺の僧興義なる飄逸な趣きをそなえた畫僧にしている。

秋成は、作品の冒頭で、興義に畫名があったこと、とくに鯉魚の繪に巧みで寺務の間に湖に舟を浮べて鯉魚の繪に心を凝らし、夢中に得たものを覺めてのち畫く藝術三昧の自由人であること、諧謔の才能を持つ閑達な人柄であることなど、その酒脱な人物像を詳しく紹介しており、また、話の末尾にはつぎのような逸話を記している。

「其終焉に臨みて畫く所の鯉魚數枚をとりて湖に散せば、畫ける魚紙繭をはなれて水に遊戯す。ここをもて興義が繪世に傳はらず。其弟子成光なるもの、興義が神妙をつたへて時に名あり。閑院¹⁰⁾の殿の障子に鶏を畫しに、生る鶏この繪を見て戯たるよしを古き物がたりに載たり。」

興義の名は、この逸話が示すように、『古今著聞集』卷第十一「成光閑院の障子に鶏を畫く事」に。

成光、閑院の障子に鶏をかきたりけるを、實の鶏見て戯けるとなん。此成光は、三井寺¹¹⁾僧

5) 『醒世恒言』、明末の馮夢龍の撰、恒言：國語体の通俗小説

三言：醒世恒言、喻世恒言、警世恒言。

6) 『薛録事魚服証仙』、『醒世恒言』の中第二十六卷所收 中國小説。

7) 『古今説海』、明の陸樞が編んだ小説。

8) 『魚服記』、『古今説海』の明の陸樞が編んだ小説集の三十五卷に收められているのが「魚服記」である
林羅山怪談全書卷二「魚服」(古今説海の「魚服記」の翻譯。

9) 古今著聞集 鎌倉前期の説話集 三〇編 撰者 橋成季、成立 建長6年(1254年10月)

10) 閑院：京都市上京區二條通りの南、西洞の西にあった。もと藤原冬嗣の邸で、高倉天皇以降九代九十年間の里内裏となる。一二五九年焼失。

11) 三井寺：滋賀縣大津市の西北 天台宗寺門派總本山。

興義が弟子になん侍ける。」

とあるのを借りてきたものであるが、『古今著聞集』には、成光が「三井寺僧興義が弟子」であることが記されているのみであり、興義に畫名があり鯉魚の繪に巧みであったことや、夢中に見たものを覚めての、畫くという逸話については、別に典拠になったと考られる文献・作品が存在したことが知られている

興義という名と畫名があったことを結びつける有力な典拠文献としては、浅野三平氏が紹介された、『本朝畫史』¹²⁾卷二のつぎのような記述が注目される。

僧興義住江州三井寺、有畫名、成光姓未詳、會畫鷄於閑院障子、其後鷄來蹴之、其畫法學僧興義。

これも『古今著聞集』の記述と同じく成光の逸話を記したものであるが、興義に畫名があったこと、成光が畫法を興義に學んだことが記されており、成光の逸話を通して興義の「神妙」な畫境を連想させる「夢應の鯉魚」の構想と人物説定に暗示を與えたであろうことが推測される。

つぎに、興義が鯉魚の繪に巧みであったことを結びける典拠が、存在したか否かということが問題になるが、中朴幸彦氏は興義に当代人のモデルがあるとして、「浪速人樂談」の記事を紹介しておられる。^⑧

中村氏の紹介された蛇を葛子明なる人物は、浪花の人で親鸞宗¹³⁾の寺に生れ、性質畫を好み橋守國の門人となって修行し、「殊さら鯉魚を描くに妙を得たり、依て其畫を求める人多かりしゆへ、世に鯉翁と異名せしと云」とあり、僧家を出で鯉の繪に巧みてあったこと、その繪を求る人多かったことなどが共通している。「浪速人樂談」の記事を、「モデルと云うよりも、秋成の創作衝動を驅り立てた根源と見たい^⑨」とする説もあるが、鯉魚の繪に巧みで世間の評判を得ていた畫僧という興義像の造型に「浪速人樂談」の記事が暗示をえたであろうことは、認められるべきであろう、

また「夢應鯉魚」の冒頭の「ゆめの裏に江に入て、大小の魚とともに遊ぶ。覺れば即見つるまを畫きて壁に貼し、みづから呼て夢應の鯉魚と名付けり」とある部分や篇名の典拠として、齊藤純氏は、『太平廣記』¹⁴⁾「貫休の「或日夢中所觀覺後圖之。謂之應夢羅漢」という記述を挙げておられる。貫休、興義ともに畫僧であり、兩者ともに夢中に見たものを覺めたのちに想起して畫しているこ

12) 本朝畫史：江戸前期の繪畫論五卷。狩野永納が父山雪の手録をもとに編んだもの。延寶6年(1678)ごろ成立、元禄6年(1693)刊畫原、畫官、畫所などの總論的部分と畫人傳、落款、印章論とから成る。日本初の總論的畫論、畫史。

13) 親鸞宗：鎌倉初期の僧、淨土真宗の開祖。新鸞上人の起こした佛教。

14) 太平廣記：中國の小説家書五〇〇卷 宋の李昉の勅奉勅 太平興國二年(977)着手翌年成立 漢から五代までの小説、説話などを集め92項目に分けてその出典を記したもの。引用書物475種、一説話の發展の跡が知られ、信頼できる小説資料として尊重される。

と、また「夢應」という特殊な用語が「應夢羅漢」から取り用いたらしいことなどを考え合わせると、興義僧の造型に「貫休」の逸話が影響を興えたことは認めてよいと思われる。

以上の点を考えると、興義僧は、「古今著聞集」の成光の話から三井寺の僧興義という人物名と身分・時代を、『本朝畫史』から興義に畫名があり成光の畫の師であることを、「浪速人傑談」から鯉の繪に巧みで世評を得ていたことを、「貫休」から夢中に見たものを覚めてのち畫くという逸話を、それぞれ得て造型されたと考えられる。それではこのように、多くの典拠によって造型された興義像には、作者のいかなる獨自性が込められているかということが、つぎに問題になる。

この問題を考えるにあたって、まず注意しておかなければならないことは、興義像が多くの典拠によって造型されたとしても、多くの典拠を繋ぎあわせて興義という統一ある人物像を造型したことで自体が、作者の旺盛な創作意欲の表われとして評價されるべきであるということである。

「夢應の鯉魚」と「魚服記」「薛録事魚服證仙」との全体的な構想における主人公の位置の相違はまず、薛偉が地方役人であったのに對し、興義が藝術三昧の自由人として設定されたところに見られる。

薛偉はあるとき熱病にかかり、いつか鯉に化して三江五湖を游泳するという奇異な体験をし、やがて華陽の丞となる。この筋の展開について見ると、薛偉が鯉に化するのは單なる偶然であり、事件の起こる必然性に乏しい。魚服を授ける河伯の詔書には、薛偉の俗世の生活を脱したいという願いに應じたことが記されているが、薛偉がそのような願いを持っていたことはあらかじめ記されておらず、唐突な感じを受ける。また、薛偉が役人として設定されたことおよびのちに華陽の丞に世俗的な出世をしたことと、鯉に化するという奇異な体験をしたこととの間に必然性がないことである。これらのことは、薛偉と奇異な事件を無理に結び付けようとするために、構成に破綻が生じたことと示すものと思われる。

これに對して、興義は花鳥山水を描くのを好まず、捕えられた魚を湖に放してその泳ぐさまを描き、夢中にも魚と遊ぶ藝術三昧の畫僧なのであり、海神も興義の日頃の放生の功德と魚の境涯を羨む心に感じて魚服を興えるのであり、魚を描いて「細妙」の域にあった興義は、鯉に化するという体験を経て、「神妙」と稱せられる境地に達するのである。典拠に見られる構成の破綻を繕い、藝術三昧の主人公の解放された自由への夢の實現として鯉への變身が語られることにより、構成の緊密さと統一が保たれていることが注意されなければならない。

つぎに、薛偉が世俗的な榮達を願う一地方官吏であり、鯉の鱸を食べる俗間の人間であったのに對し、興義が、煩惱を超脱し、殺生を忌むところの僧侶として設定されていることが注目される。興義の施す放生の功德は、宗教人としての當然の行爲であるとともに、魚にかける愛情のおのずからなる現われとなっている。

また薛偉像が無性格であるのに、對して、興義像に剽軽な人間味が加えられたことも、「夢應の

鯉魚」の全体的な構想と密接な連関性を保っている。興義の「生を殺し鯉を喰ふ凡俗の人に、法師の養ふ魚必しも與へず」という戯れ言には、鯉魚にかける深い愛情と殺生をする世俗への痛烈な批判の意味が込められているのであり、藝境に遊び戯れる興義の心に、悟りに達したと自認する者のあるゆりやすきが潜んでいることをも暗示する設定であると言える。興義は死の危機に直面して、はじめて自己の心のすきや悟りのあまさを自覚することになるのである。

典據「魚服記」と「夢應の鯉魚」との、全体の構想における主人公像の位置と造型方法の違いは、つぎのようにまとめることが、出来るのであろう。

「魚服記」は、人間が魚に化するという不思議を構想の中心に置いているために、薛偉は奇談の枠の中の人物として、その造型に特別な關心が拂われることがなく、人物像の不明瞭、無性格さと、構造の破綻を招いたのであると思われる。これに對して「夢應の鯉魚」は興義の性向と事件に密接な連関性が與えられているのであり、興義の願いや言動に即しし事件が展開して行く。奇談という形式をとおして人間の心の内面を明らかにすることを構想の中心に置いたところに、秋成の翻案力と創造力が表れていると言える。

⑧ 「秋成に描かれた人々(二)」(「國語國文」三二の六昭和38.6)

⑨ 浅野三平氏の論「夢應の鯉魚」の成立(「女子大國文」三一〇昭和38,12)

Ⅰ 結 論

この作品は、古今説海の「魚服記」および醒世恒言の「薛録事魚服証仙」を典據として、平生の放生の功德により、一人の僧が三日間一匹の鯉魚に化して琵琶湖を心ゆくまで遊泳するという物語である。

病氣にかかって息絶えた假死から蘇生した僧興義は、鯉となつている自分が、漁師に捕えられ俎盤の上で切られようとしたときに、夢が醒めたと語るのだった。さらに讀者に迫ってくるのは、「師が物がたりにつきて思ふに、其度ごとに魚の口の動くを見れど、更に聲を出す事なし」という、不思議なことを眼前にした人人の驚きであった。

抑壓された江戸時代に、ひそかに「變身」を夢みた文學愛好者にとって、秋成のこの作品は、正に救いであったのかもしれない。陰惨な話の多い雨月物語の中でも、「夢應の鯉魚」のみが、明るく幻想的なのは、ひとえに「變身」という人類のもつ、悠久にして雄大な夢を、魚をかりて表現したからであろう。

日頃自由な「魚の遊びをうらやむ心」をもっていた興義は、海神の詔によって鯉魚に化すことがで

きると、琵琶湖周辺の歌枕を思いのままに泳ぎめぐる。しかし空腹に堪えかねて釣の餌を飲み、文四に釣上げられ、あわや殺されかかったとき、はじめて魚のもつ自由が餌の誘惑から身を守る自制心との葛藤の連続であり、身の自由と安全を守るためには本能との苦しい戦いに打勝たなければならないことを身をもって体験したとき、興義ははじめて魚の生活を深く理解したのであり、鯉魚を描いて「神妙」と稱せられる域に到達しえたのである。

中村幸彦氏はこの作品を寓意小説と見ておられる。「藝術三昧境」は、鯉となって遊泳する時の興義であるが、うえて食を求めんとすれば、人の好餌にかかって現実の手ひどい目に逢う。この著者秋成は、若い時には學問に自由な生活を送った。俳偈をやって見たり、友人と遊び歩いたりしたが、友人との関係で小説や學問などの亂讀もした。若い頃から文學に熱中し、その後日本の國學にも興味を覚えて「雨月物語」のような文學と古典學問の結びついた作品を書いた。日本の古典を巧みに駆使し、しかも自由奔忙な獨特なスタイルを作って美文を創造している。巧みな文章と鋭い觀察眼とを持つことは、文學としての第一の条件であるが、それを兼ね持ったところに秋成の天性の文學肌があるのである。そういう秋成が、この著作當時はすでに養父を失って商買と家を繼ぐことになったが、まもなく火災によって家財を消失し、これまでの秋成自信の學問文藝三昧境から初めて現實生活に直面した。こうした經驗や反省は、彼の一身に必ずあったはずであるとして、主題を「藝術家と現實生活の問題」にあつたと解しておられる。即ち、自由でありたいとの願いが叶えられて鯉魚になることを得たが、体験を通して知り得たのはここにも無限の自由はあり得ないということであった、という教訓を補えて解釋することができる。

興義は繪の巧みを聞いて乞い求める人々に對して「生を殺し鮮を喰う凡俗の人に、法師の養う魚必ずしも與えず」と戯れる興義の言葉からは、魚の繪を愛でながらも殺生をする俗人に對する宗教人としての批判の意識がみられるとともに、悟りに達したと自認する者の心の奥に潜むある弛みを感じとることが出来る。興義は、一切煩惱を解脱したはずの身でありながら本能に負け、釣針にかかって死の危機に直面するのであり、ここではじめて悟りに達したはずの自らの心の奥に潜む弱さを自覺する、興義が味わった苦しみは、衆生を悟りに導く身が本能に負けて魚畜の類に落ちたことへの佛罰に値するものであり、自らの心の奥に潜む弱さを自覺することは、宗教人としての悟りの深まりを意味するからである。魚に化するという体験を経て人間的にめざめていく興義の姿は、生計を維持するための方策に苦しみながら俗世間的な榮達を望まず、自らの生活を厳しく律して文筆生活に生きた秋成の面影を感じとることが出来るであろう。

こうして「夢應の鯉魚」は奇談的な明るさを保ちながら、人間性の深奥にひそむ弱さを洞察した点において、高い價値を有する作品であると言ふことができよう。

參 考 文 獻

- 上田秋成文學の研究 大輪靖宏著, 笠間叢書昭和51年刊
 日本の幽霊 松田修 學灯社
 (國文學8月號)由良君上美
 上田秋成(怪異と超越の位相)學灯社
 雨月物語 重友毅 弘文堂
 雨月物語 鴉月洋 角川書店
 秋成日本文學研究叢書 有精堂50年刊
 封建庶民文學の研究 森山重雄 三一書
 秋成のテンカン症とデーモン 大場俊助著 芦書房
 雨月物語全釋 野田壽雄著 武藏野書院
 近代文藝16 日本近世文學會 笠間書院
 近世文藝第七號 日本近世文學會 八木書店古書部
 近世文藝第五號 日本近世文學會 八木書店古書部
 近世文藝第四號 日本近世文學會 八木書店古書部
 解釋と鑑賞7月號(上田秋成, 幻想の方法)至文堂
 解釋と鑑賞6月號(上田秋成と雨月物語)至文堂
 解釋と鑑賞6月號今昔物語の新しい研究と展望, 文章と文章論
 文藝第拾年第8號京都文學會
 國語と國文學八月號 國語と國文學編輯部 至文堂
 國語と國文學一月號 東京帝國大學國文研究室編輯 至文堂
 國文學日本の幽霊松田修由良君上美對談 學灯社
 妖怪入門 阿部主計著 雄山閣
 韓國の怪奇譚 朴容九著 瑞文文庫
 日本文學大辭典 藤村作編 新湖社版

國文抄錄

「夢應의 鯉魚」

李 仁 燁

江戸時代의 上田秋成(1734~1809)는 小説家로서 日本文學史上 큰 업적을 남긴 사람이다. 그의 小説 중에서도 「雨月物語」는 怪異小説集으로, 초현실적인 것이 등장하지만 秋成의 小説에 있어서 초현실의 세계와 人間의 世界와는 동떨어진 것이 아니다. 초현실의 세계는 人間世界의 延長이다. 단 하나 다른 점이려면 人間의 能力을 초월한 초능력이라는 점이다. 즉 神의 힘, 邪神의 힘이다.

採錄, 翻案, 考證에서 怪異譚은 허다하다. 또 近世를 통하여 어느 나라에나 怪異幻想은 民間에 깊이 뿌리를 내리고 있는 것은 말할 것도 없다.

꿈이라는 것은 실로 古代에서 近世에 이르기까지 靈夢이 되어 나타나기도 하고, 應夢으로 나타나기도 했다. 이 怪異와 꿈의 이야기가 「夢應의 鯉魚」라는 작품이며 主人公인 興義의 蘇生譚이며, 應夢譚이다.

이 作品의 줄거리는 人間이 잉어로 환한다는 것으로, 대개 다음과 같다.

延長(923~930)때의 일로, 三井寺의 興義라는 高僧이 寺務 틈틈이 琵琶湖에 나가 배를 띄우곤 했다. 그는 어부에게서 잉어를 사서는 放生하고, 그 모양을 그림으로 그리곤 했다. 어느날 興義가 중병에 걸려 죽게 되었다. 사람들이 장사지내려고 본 즉, 興義의 가슴이 따뜻해서 기다리고 있는 즉, 3일째 되는 날에 눈을 뜨고 소생했다.

그의 소생담에 의하면, 병으로 너무 괴로운 나머지 열을 식히려고 호수 속에서 헤엄치고 있었는데 海神이 나타나 興義의 放生의 功德과 물고기의 자유로운 생활을 부러워 하는 興義의 마음에 감동하여 魚服을 주게 된다. 이른바 主人公의 자유의 꿈의 실현으로서 잉어로 변신시킴과 함께, 海神은 「단, 향기로운 먹이에 현혹되어 낚시줄에 걸려 죽는 일이 없도록」하는 경고의 말도 하게 된다. 그러나 興義는 시간이 지남에 따라 배가 크가 견딜 수 없어서 낚시 먹이를 먹게 되어 낚시꾼에 잡히게 되어, 생선회를 하려고 몸이 잘린다고 생각하는 순간 꿈에서 깨어난다고 하는 줄거리이다.

이 1編이 奇談의인 요소를 포함하여 人間의 집념과 순수성에의 호소를 묘사한 것이다.

海神의 경고는 殺生을 꾀리는 僧侶에게 俗世的인 욕망을 끊은 佛弟子인 자의 행위를 규정하는 힘을 갖게 하며, 계율을 깨뜨리는 일은 승려로서의 全人格을 否定하는 것을 의미하는 것이다.

승려의 신분인 興義는 齋주림이 극한에 이르러 佛弟子로서의 계율을 어겨 딱하게도 물고기

로서의 욕망에 사로잡혀 버리는 心理의 변화에 초점이 모아지고 있으며, 海神의 경교에도 불구하고 佛弟子의 신분을 잊고 단순한 물고기의 마음으로 전락하는 것이, 자신을 죽음의 늪에 밀어 넣는 원인이 되는 것이다. 이것은 佛弟子의 마음 속에 있는 약한 면을 자각하고 종교인으로서의 각오를 다진 것을 암시하고 있는 것이라 생각한다.

평상시 자유스러운 「물고기의 생활을 부러워하는 마음」을 갖고 있었던 興義는 막 죽을려는 찰나, 비로소 고기가 가진 자유가 먹이의 유혹에서 자신을 지키는 自制心과 的 갈등의 연속이며, 몸의 자유와 안전을 지키기 위해서는 本能과 的의 괴로운 싸움에 이기지 않으면 안된다는 사실을 체험했다.

秋成은 여기서 꿈과 현실과의 怪異를 통하여 無限의 자유는 있을 수 없다는 教訓을 암시하고 있는 것은 아닐까?

이리하여 「夢應의 鯉魚」는 奇談적인 밝은 색채를 띄면서 人間生의 밑바닥에 잠긴 人間 一面의 약한 점을 통찰한 점에 있어서 높은 가치를 지닌 작품이라고 말할 수 있을 것이다.